

富山市立図書館

図書館だより

第62号
2014.2

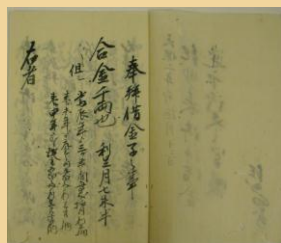
史料からたどる富山歴史探検Ⅱ

富山市立図書館長が古文書を解説し、江戸時代の人々の暮らしにせまります。今回は、売薬関係の史料から見てきた、暦と暮らしの関わりを紹介します。図書館だより第59号特集「富山町の橋とゴミ」に続く、富山歴史探検の第2弾です。

1年は13ヶ月ある？ ～売薬商人の借金と返済～

富山市立図書館館長 加藤達行

以前に売薬関係の古文書で話を、と依頼を受け、密田家文書(※1)から『紀州表御拝借金連印証文之写帳』(※2)を使って、現代とは違った江戸時代の借金の話をしました。今回はその一部を紹介します。



(本文)

奉拝借金子之事

合金千両也 利足月七朱半

但シ 当辰年ヨリ三ヶ年之間毎歳極月利足納
来ル未年ヨリ元金之内五百両利足共納
来ル申年ニ至リ残金五百両利足共納

(以下 略)

この文書は、紀州和歌山藩で売薬商売をしている富山の23名が、紀州藩西御番所の川浚御構銀から千両を借用したものです。借用の理由について、『富山大火について川浚御講銀拝借願書下書』(※3)に、「当四月十二日国元不存寄大火ニ而仲間一統類焼

仕当惑仕罷在候、」とあり、天保2年(1831)4月に富山が大火に見舞われ、家が焼失したことが挙げられています。

また、返済方法は、最初の3年間は利息だけを年末に納め、4年目と5年目に元金500両と利息を納めるという条件で借り受けたことがわかります。

さて、年末の魚津市の大火は記憶に新しいところですが、天保2年、富山町も大火に見舞われました。司書のSさんに「富山の災害の記録を見たい」と尋ねると、「網羅的なものなら、これはどうですか。」と『富山県気象災異誌』(富山地方気象台 1971)を紹介してくれました。この本は、県内で起こった地震や火災などの災害をまとめたものです。出典も記され、災害の概要を知るのに便利です。

この火事は、4月12日(今の暦では5月23日)正午頃、西田地方神明社の東から出火しました。富山城内はもとより城下町一帯が焼け、社寺、人家8,343戸のほか、土蔵納屋をあわせると9,000以上が焼失し、死者70名余を出した未曾有の火災であったことがわかります。紀州藩で売薬商売を行う富山の商人たちも、家屋敷を焼失したと考えられます。

では、先の古文書に戻ります。借金は千両で、利息は「月七朱半」とあります。「朱」とは何か。早速参考室へ。「朱色とか顔料とか、江戸時代の通貨

※1 富山売薬を代表する密田家に残されていた古文書。

目録：『密田家文書目録 富山市日本海文化研究所紀要 第十二号』(富山市日本海文化研究所 1998)

※2 『密田家文書目録』文書番号：2-(2)-24 富山市郷土博物館所蔵。

※3 『密田家文書目録』文書番号：2-(2)-25 富山市郷土博物館所蔵。

「一朱金」などは思いつくだけでも、利息と結びつかない。」と、司書のK君に相談。K君「まずは『広辞苑』（岩波書店 2008）でも見てみますか。」と早速調べてくれました。

しゅ「銖・朱」：①重量の単位。②江戸時代の貨幣の表示。③利率の名目。1割の一〇分の一、分、歩の一〇分の一をいうこともある。

これを元に利率を求めると、次の B が妥当と思われるが、結論は保留。

A. 「1割の一〇分の一」の場合

1朱=利率1銖だから、

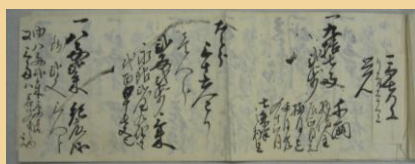
7.5朱=利率7.5銖となる。…大きすぎる！

B. 「分、歩の一〇分の一」の場合（※分=1銖）

1朱=利率0.1銖だから、

7.5朱=利率0.75銖となる。…妥当では？

次に、この借金の返済について、翌年作成された『拝借金利足取立帳』（※4）を見てみます。



覚

九十七両二歩 千両拝借金辰正月より極月迄
閏月共々十三月七朱半の利足

右之分 三十六人わり

一人分 二両二歩三朱永銀二匁九厘つゝ

代百四十七文也 (以下 略)

利率が年額「九十七両二歩」ということは、利率は

$$\begin{aligned} \text{利率} &= 97 \text{ 両 } 2 \text{ 歩} \div 1000 \text{ 両} \\ &= 97.5 \text{ 両} \div 1000 \text{ 両} = 9.75 \text{ 銖} \quad (\text{※} 2 \text{ 歩} = 0.5 \text{ 両}) \end{aligned}$$

となります。なお、天保3年の辰年は「閏月」を含むため、1年は13ヶ月です。このとき「朱」を0.1銖とすると、0.75銖（「月七朱半」）×13ヶ月=9.75銖。利息は97.5両、0.5両は2分(歩)なので、ぴつたりと計算が合います。

そこで、司書のOさんに、「天保3年の閏月を調べたいのだが…」と。すると、『日本暦日便覧 下』（湯浅吉美／編 汲古書院 1988）を出してくれました。天保3年は、壬辰の年で11月の次に閏11月があり、年間では384日ありました。因みに天保2年は、閏月がないので354日です。大の月が30日、小の月は29日ですから、12ヶ月で354日となります。季節のずれは閏月で調整していました。この

ため、毎年作られる暦は、農作業等の生活の時期を示す大切なものだったのです。江戸時代は、年によって1年の月数が違い、月利による借金の返済額も年毎に変わっていたのです。「今年はいやに1年が長いねえ」と、ご隠居の一言が聞こえそうです。

富山売薬商人たちは、文政11年紀州（紀州藩と田辺領）での営業を継続するため、当地の合業仲間に参加することとなりました。冥加金として紀州藩に10両、田辺領に5両を支払うことになっており、仲間は36人分で構成され、仲間としての入用金を36人足割で負担しているのです。さて、この千両も、36等分に分割されています。証文に署名しているのは23名ですが、36等分され、千両の1/36にあたる27両3歩永2匁7分7厘を「1人足」分としているのです。「36人足」といっても、36人を意味せず。しかも、「六歩五厘」など、1人足以下の負担割合もあり、負担割合=権利の意味が強いものです。天保3年や6年には23人で36人足を負担していますが、12年には、19人となっています。また、そのメンバーも移動しているのです。これらは、別の機会に考えてみたいと思います。

ところで、この借金はどうなったでしょう。天保3年には利息だけは返していますが、天保8年には、また千両を借用しているのです。そして、天保12年には、皆済したという帳面が残され、元金500両と利息48両3分(月7朱半)を返しているようです。返済完了時期にはまた借金しているかもしれません。嘉永2年(1849)にも千両を借りているのです。

ちょっと、違った江戸時代の生活です。司書に手伝ってもらって助かりました。市立図書館本館は平成27年8月末頃までに、西町旧大和跡に建設中の建物に移転する予定です。市民の皆様は役立てていただけるよう、幅広い図書等の収集に努めて参ります。また、「知を深める図書館」を目指し、市民に親しまれ、気軽に相談できる図書館づくりにも職員一同頑張っていますので、よろしくお願ひします。

※4 『密田家文書目録』整理番号：2-(2)-34 富山市郷土博物館所蔵。

ものづくり日本

戦後、日本はものづくりを中心に復興し、高度経済成長を遂げました。日本の技術力の高さは世界的評価を受け、ものづくり産業はわが国躍進の大きな原動力となりました。

しかし、近年ものづくり産業を取り巻く環境が大きく変わってきました。今回はわが国が誇る「ものづくり」のあり方について考えます。



『メイドインジャパン
驕りの代償』
井上久男/著
NHK 出版 2013

日本の家電や自動車メーカーへの著者の17年間の現場取材に基づいて、日本経済衰退の実情から再生の道を探ったノンフィクションです。著者は、日本の製造業は工場に欠陥のない商品を作るのは得意だが、品質とは別の経営者の劣化が「新しい価値」の創出を阻んでいると述べています。それが「メイドインジャパン」衰退を加速させているというのです。しかし、日本の「武器」は、世界でも評価されている「ものづくり」であることは間違いなく、「武器」をどう磨くかが必要とも述べています。

『ものづくりを超えて 模倣からトヨタの独自性構築へ』（和田一夫/著 2013 名古屋大学出版会）

自動車は3万点にも及ぶ部品から造られています。製造過程において部品はどのように管理されているのでしょうか。本書では、トヨタ自動車の生産方式である「かんぱん方式」について、ものづくりの現場で「かんぱん」とは何かについて詳しく説明しています。トヨタ自動車が生み出した「管理」のしくみ、独自性について徹底的に探ります。

ものづくりをささえているのは会社や工場の規模にかかわらず、そこで働く人たちの熟練した技術や努力です。



『どっこい大田の工匠たち
町工場の最前線』
小関智弘/著
現代書館 2013

この本は町工場で旋盤工として働きながら、優れた小説などを発表し続けてきた著者が16人の凄腕の職人たちを訪ねて聞き書きしたルポです。

ものづくりの町として有名な東京都大田区が「大田の工匠100人」という表彰制度を設けました。この制度は大田のものづくりをささえる優秀な技能者の中でも従業員3人以下の企業で活躍している職人に光をあてて、5年間で100人の工匠を選ぶものです。著者も審査委員に加わり、選ばれた工匠のうち16人を訪ね、人生の歩みとものづくりへの思いを聞き書きしました。

この本に出てくる職人の技術はハイテクや最先端技術と呼ぶようなものではありませんが、伝統を受け継ぎ磨き上げてきた技です。人工心臓、新幹線の制御装置から切り子細工まで、ものづくりの最前線に生きる工匠たちの物語です。

また、直木賞を受賞したことでも知られる小説『下町ロケット』（池井戸潤/著 2011 小学館）はこの大田区の町工場を舞台にしています。宇宙工学研究をあきらめた主人公佃航平は実家の佃製作所を継ぎますが、大企業に翻弄され倒産の危機に瀕します。町工場が意地を見せた国産ロケット開発にかかわる物語です。

（八尾ほんの森 高田）

レファレンスあれこれ

Q. <山部赤人>が富士の山を詠んでいる。人物についてと、どのような歌か知りたい。

A. まず、人物について調査しました。『新潮日本文学辞典』（新潮社 1988）や『和歌・俳諧史人名事典』（日外アソシエーツ 2003）に山部赤人の項目があり、奈良時代の歌人で万葉集に作品が載っていることが分かりました。『日本古典文学大事典』（岩波書店 1985）でも調べることができ、人物など詳しく書かれています。

次に、万葉集に関する辞典を調べました。『万葉集事典』（学灯社 1994）の中の万葉集全作者事典の部分に、山部宿禰赤人（やまべのすくねあかひと）として人物の紹介が載っていました。『万葉集歌人事典』（雄山閣 2007）の作者・作中人物のところにも山部宿禰赤人が載っており、こちらはかなり詳しく紹介されています。『万葉集講座 別巻 万葉集事典』（有精堂 1975）では、作者別研究史に山部赤人があげられ、評価や作品研究が載っています。

この他の図書では、『日本詩人選3 高市黒人・山部赤人』（筑摩書房 1971）、『和歌文学大系 17 人麻呂集（赤人集 山部赤人）』（明治書院 2004）、『さまよえる歌集 赤人の世界』（集英社 1979）があります。

続いて、山部赤人が詠んだ富士の山について調査しました。『万葉集歌人集成』（講談社 1990）に山部宿禰赤人（山部宿禰明人）の項目があり、簡単な人物紹介のあと、

“天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 布士（ふじ）の高嶺を 天の原 振り放 け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 不尽（ふじ）の高嶺は”

という歌が載っていました。反歌（長歌の後に置かれる短詩形の詩『和歌大辞典』（明治書院 1986））として、

“田児の浦ゆうち出でて見れば真白にそ不尽の高嶺に雪は降りける”

があがっており、山部宿禰赤人が詠んだ他の歌も載っています。それぞれ万葉集の巻と番号が付いていて、“天地の…”は、『万葉集』の3巻の317であることが判明しました。

巻と番号がわかれば、『新日本古典文学大系 1 万葉集 1』（岩波書店 1999）や『新編日本古典文学全集 6 万葉集 1』（小学館 1994）等で、解説を読むことができます。

万葉集に関する資料は数多くありますが、事典では『万葉集ハンドブック』（三省堂 1999）がわかりやすくまとめられています。万葉集の成立や秀歌、万葉人の暮らしや表現、主要歌人、地図や年表が載っています。秀歌の部分には、山部赤人に関する記述があり、“山部宿禰赤人の不尽山（ふじやま）を望める歌一首”として、前述の歌と反歌が、また、主要歌人部分に山部宿禰赤人が紹介されていました。

万葉集で詠んでいる人物が分からない場合には、『万葉ことば事典』（大和書房 2001）で言葉から調べることができます。“ふじ（不尽）”の項目があり、山部赤人の著名な「望不尽山歌」として“天地の…”があげられています。ちなみに、「富士」という表記は平安朝になってから定着したものと書かれています。この他、『万葉びとの心と言葉の事典』（遊子館 2011）では、歌い出しの言葉から探せます。

（本館 尾屋）